



第十八回酒都で聴く居囃子の会  
比翼連理の名文句で知られる  
「楊貴妃」

—絶ちがたき恋慕と哀傷—

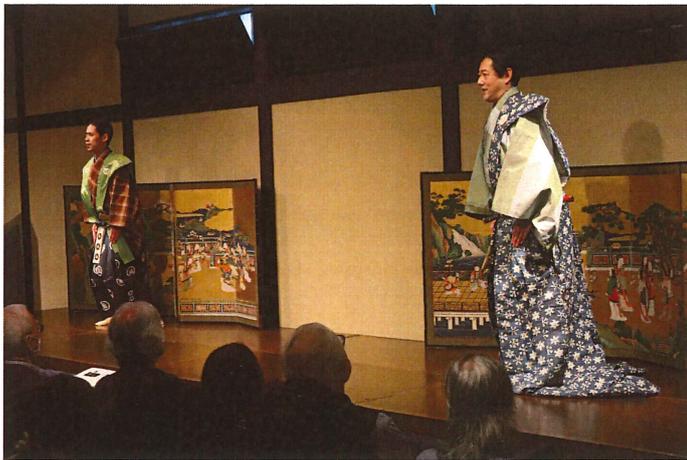
2023年11月4日（土）

会場 白鷹緑水苑 宮水ホール

午後14:30開演（開場・受付開始14:00）

古くから芸能と縁の深い酒都・西宮の造り酒屋において、地元在住の能楽師による謡と囃子で、能特有の音楽性と言葉の美しさを楽しむ「居囃子の会」。18回目となる今回は、高貴な女性を主人公とした能のなかでも、その気品と優美さで「定家」「大原御幸」と並び称される「楊貴妃」を取り上げました。

舞台上には、玄宗皇帝と楊貴妃が宮廷において女官達と共に「花軍（はないくさ）」という風流なゲーム興じている様子を描いた屏風が置かれています。「花軍」とは、今を盛りとばかり咲く花々を二手に分かれた女官達に持たせて手打ちあい、花の色香を競う遊びです。二人を取り巻く宮廷の華やかな様子や、幸せで憂いの無い愛の日々を象徴するような色鮮やかな屏風ですが、後に二人を待ち受ける運命に思いを馳せると、印象も変わってくるように感じました。冒頭は、この『花軍（はないくさ）』の屏風にちなみ、大蔵流狂言「花争（花あらそい）」で幕を開けました。



続いて、曲の背景を知る手引きとして、能では描かれない前半も含めた『長恨歌』全文の朗読を二胡の演奏とともに聴きいただきました。『長恨歌』で永遠の愛を誓う言葉として現れる「比翼連理」の名文句が能「楊貴妃」にも登場しますが、結局はそれも虚しく終わったことへの喪失感と無常観が余韻として深く心に残ります。長恨歌では、楊貴妃の死後、皇帝は深い悲しみの内に、道教の方士に楊貴妃の魂の行方を探すよう命じ、そこから能の物語につながってゆきますが、この前半に描かれた楊貴妃の人物像や、二人の幸せな愛の日々、その後楊貴妃が死に至る経緯などを知ることによって、別離の哀惜の心情がより一層深く胸に迫ってくるような思いがしました。

続く謡と小鼓による独鼓でお聴きいただく「班女」のクセでは、形見の扇に離れ離れになった恋人を偲ぶ遊女の様子が、長恨歌を引いた謡で語られました。



休憩をはさんでの後半はいよいよ番囃子「楊貴妃」です。「楊貴妃」は唐の詩人白樂天が、玄宗皇帝と楊貴妃の悲運の物語を格調高く謳いあげた『長恨歌』の後半を、ほぼそのまま舞台化した作品で、その謡は長恨歌の原文を巧みに、縦横に駆使した名文で知られます。優美さと情感を湛える謡が、この曲の主題といえる、生死による別離を超えた恋慕の情と、絶ちがたい愛情ゆえの悲哀を切々と描き出します。また今回囃子は「甲之掛（かんのかかり）」という特殊演出で演奏されました。これは序ノ舞の冒頭が通常とは異なり、時折差し込まれる笛の高い音色が楊貴妃の凜とした美しさを引き立てる演出です。楊貴妃が「霓裳羽衣の曲」を舞う優美な姿が目に浮かぶようでした。また曲の最後は通常とは異なり、笛の音色が静かに消えてゆき、深い余韻を残すような幕切れとなりました。



公演後は番外として、色づき始めた中庭の紅葉の下、出演者を囲んで蔵出し限定酒を愉しむ「紅葉賀の小宴」が開催されました。若手シテ方による謡「邯鄲」「菊慈童」も披露され、盃を片手に演者と過ごす、なごやかな交流の場となりました。